

主 題：目から梁を除きなさい2

聖書箇所：ローマ人への手紙 2章4－5節

私はさばかれることはない、そのように罪のさばきは自分とは無関係だと信じ込んでいた人々に、実は彼らがさばきに向かっていることをパウロは悟らせようとしてしました。2：1からこのように記されています。

「1 ですから、すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行なっているからです。2 私たちは、そのようなことを行なっている人々に下る神のさばきが正しいことを知っています。3 そのようなことをしている人々をさばきながら、自分で同じことをしている人よ。あなたは、自分は神のさばきを免れるのだとも思っているのですか。4 それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。」

「弁解の余地はない」とパウロは言いました。あなたは神の前で言い訳を立てることも出来ないし、弁明の余地はない、なぜなら、あなたが罪人であることは明らかだからと彼は言うのです。あなたの内に罪があるゆえにあなたは必ずさばきを受けるのだと、パウロは読者たちに教えようとするのです。前回見たように、「必ずさばかれるその二つの理由」を彼は明確に私たちにも教えてくれました。一つ目は、彼らが意識的に神に対して不従順だから。知らずに不従順なのではなく、知っていながら彼らは神に逆らう選択をしたのです。意識的不従順が問題だということをこの1－3節で学びました。二つ目は4－5節に意識的拒絶であるということを見ました。分かっているが意識的に自分の意志でもって神の恵みを拒んでいる、だからさばかれるのだとパウロは言うのです。彼は神の恵みがどんなにすばらしいものであるかということをも4節で教えてくれました。「神の恵み」、それはイエス・キリストを信じるすべての人を例外なく救いへと導いてくれるものです。「神の恵み」はどんな罪人でもその罪を完全に赦し、永遠のいのち、新しいいのちをもたらすのです。神が罪人である私たち一人ひとりを、あなたを愛してください、これだけでも驚きです。ここにいるだれひとりとして、神に愛される人はどこにもいません。それとは全く相反する者たちがここに集まっています。神からのろわれて当然の、神から怒りを受けて当然の者たちがこの世界に満ちあふれています。この人類の歴史はその人たちで溢れています。しかし、そのような私たちに神はあわれみをもって、そのような私たち罪人をあなたを愛してください、しかも愛しただけでない、神はあなたを悔い改めへと導いてくださると言います。すなわち、神ご自身が、どうすることも出来ない私たち、霊的に盲目な罪人を救いへと導いてくださるのだと。そのようなすばらしい恵みを神は私たちに与えてくださったのです。神の恵み、これが救いの核心です。神に対する私たちの愛でも、私たちの行ないでもない、神の一方的なご意志とご慈愛に基づくものであると、そのことを私たちはみことばから学んだのです。あなたが神を愛したから神があなたを愛してくれたのではなく、神があなたを愛してくれたゆえに、神はこのようにすばらしい救いを備え、このような救いへとクリスチャンであるあなたを導いてくださったのです。

このパウロの手紙を読んでいた多くのユダヤ人たちは、この神の備えてくださったすばらしい救いを、この罪の赦しを、悲しいことに拒み続けていたのです。彼らは自分たちは大丈夫、天国に行けると思い込んでいました。なぜなら、自分たちはユダヤ人だから、神の選民だから、しかも確かに、1章で教えているような同性愛の罪であるとか、そのような罪を私たちは犯していない、だから、彼らは私たちに比べてはるかに重い罪人である、彼らは永遠の滅びに至ってしかるべきだけれど、そのような罪を犯していない私は間違いなく救いに与るであろうと、そのように彼らは信じていた訳であり、そのように彼らは自らの正しさ、聖さというものを自負していたのです。パウロがしたかったことは、そういう自分の愛する同胞たちに、「目覚めなさい！実は、あなたたちも彼らと同じように滅びへと向かっているのだ」ということを明らかにしようとしたことでした。

☆さばきの確実性

1. 弁解の余地はない、必ず、さばかれる
2. 神の恵みを軽んじている

4節にはこのようなことばが出て来ます。「軽んじているのですか。」と。これは「問題にしない、軽蔑する」という意味です。このことばは新約聖書の中に幾つか出て来ますが、Iテモテ4：12には「**年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。…**」とあります。「**軽く見られないように**」、年が若いからといって周りの人々から軽蔑されないように、信者の模範になりなさいとパウロはテモテに教えました。また、Iコリント11：22には「**飲食のためなら、自分の家があるでしょう。それとも、あな**

たがたは、**神の教会を軽んじ、…**」とあり、これは聖餐式のことです。その当時、コリントの教会の人たちは裕福な人々が集まって来て自分たちだけが飲食していたのです。というのは、飲食と聖餐式はつながっていたからです。彼らは聖餐式をし、そして飲食を、愛餐を楽しんでいたのです。でも、自分たちだけが楽しんで、食べ物を持って来ることができない人たちのこと全く無視していたのです。本来、兄弟姉妹たちに対して愛を示すべきその集まりが、いつの間にか、自分たちだけの集まりになってしまっていたのです。そのような大変な状態にあったこのコリントの教会に対して、パウロは飲食のためなら自分の家があるでしょう？自分の家でしなさい、あなたがたは、神の教会を軽んじている、いったい、教会はどういう場所なのか、何のために集まっているのか、そのことをあなたたちは軽んじている、教会を、そして、神を軽蔑していると言うのです。このようにこのことばは使われているのです。パウロはここで多くの人々に対して、あなたたちの過ちは神の恵みに対してそれを軽蔑していることであると言うのです。ジョン・マレーという神学者はこのことばに関してこのように言います。「あるものの意義を過小評価すること、それを軽く考えること、従って、それに相応しくない評価をすることである。それはまた、激しい屈辱、または、軽侮（＝人を見下すこと）の形を取ることもできる。」と。つまり、私たちは「神の恵み」を学んで来ているのですが、恵みを学べば学ぶほど、なぜ、このような愛をもって私のような者を愛してくださるのか？と、私たちはみなそのことに気付くはずです。信仰者である私たちは日々、そのことに気付かされているのです。そうすると、私たちの信仰の歩みにおいて私たちは日々「神さま、なぜ私のような者がこのようなあなたのご慈愛をいただく価値があるのですか？なぜ、こんなに私のために良くしてくださるのですか？なぜ、こんなに祝福を与え続けてくださるのですか？」と、このような感謝を神に捧げる人たちは、自分が何ほどの祝福も神からいただく資格はないということをしっかり理解し、そのことに心を留めているはずです。私たちはこの神の恵みをいただく資格はないのです。なぜなら、私たちは神に逆らい続けて来たからです。信仰をもったと言っても、私たちの歩みは神に対する不信仰に不信仰を重ねているのです。なぜ、このような者をこれほど愛してくださるのでしょうか？なぜ、このような者にこのような祝福を与えてくださるのでしょうか？マレーが言うように、彼らが取っている態度、「**軽んじた**」というのは、そのすばらしい神の恵みに対してそれを過小評価している、それを相応しく評価していない、それだけでなく、それを軽く侮っている、軽侮しているのです。そのような態度をもって彼らは歩んでいた、また、歩んでいるとパウロは言うのです。

何に対して彼らはそのような態度を取っているのでしょうか？みことばが明らかに教えています。三つのことがここに記されています。三つの名詞がここにあります。「**慈愛**」と「**忍耐**」と「**寛容**」です。この三つともすべて、神が私たちに与えてくださったものです。

「**慈愛**」：もうすでに見てきたように、罪人に対する神の深いあわれみです。あなたが神を愛する前から神はあなたのことを愛してくださったのです。その愛というのは、あなたがどのようなことをしても神は良しとしてくれるというわけではありません。そのような間違った愛ではありません。神の愛というのは、あなたにとって最も大切なことを喜んで犠牲をもって与えようとしている、あなたに救いが必要だから神は喜んでご自身のいのちを引き替えに、あなたにそれを与えようとしておられることです。そして、私たちがのような者に対して神は日々豊かな愛をもって、私たちの罪を赦し続けてくださっているのです。「**慈愛**」は「好意、情け深い」という意味のあることばです。まさに、神の私たちにに対する好意であると私たちは気付かされるのです。なぜ、このような者がこれほど愛されているのかと。

「**忍耐**」：バークレーという神学者はこの「**忍耐**」ということばについて次のような説明を加えています。「このことばは休戦に対することばである（休戦＝戦争を休むということです）。まさしくそれは、敵意や敵対行為の停止を意味している。しかし、期限付きの停止を意味している。」と。忍耐というずっと永遠に続くものかというところではない。このことばは休戦である、期限付きで何かしようとする行為を留めておられるというのです。終戦ではなく休戦なのです。必ず、またその戦いは続くのです。でも今一時、その戦いが止んでいるというのです。だれ一人として間違っただけではないことは、神は私たち罪人に対するさばきをもうしないと言われたのではないということです。罪に対するさばきが無くなったのではないのです。罪に対するさばきは必ずやって来ます。しかし、神は一時的に今下してもよいさばきを停止されて先送りしておられる、延ばしておられるのです。なぜ、そのようなことをしておられるのでしょうか？ペテロがⅡペテロ3：9で教えているように「**主は、ある人たちがおそいと思っ**ているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して**忍耐深く**あられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」と、「その約束のことを遅らせておられるのではありません」それには目的があると言うのです。どのような目的でしょう？「あなたがたに対して**忍耐深く**あられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられる」と、罪人が一人でも永遠の滅びに至るのではなく、悔い改めに進み、この救いに至るようにとその救いの機会を与え続けておられると、これが神の忍耐です。今、さばきを

下してもだれ一人この神の前に文句を言うことなどできません。なぜなら、さばかれて当然の私たち罪人です。でも、神はそのような罪人に対して救いの機会を与えてくださっている、神のこの「忍耐」のことです。

「寛容」：辛抱とか、辞書を見ると「過失を咎め立てず人を赦すこと」と記されています。その人の過失を咎めない、その人を赦すことであると、まさに、そのような神を私たちは聖書の中に見ます。旧約聖書エゼキエル33：11をご覧ください。「彼らにこう言え。『わたしは誓って言う。——神である主の御告げ。——わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。』」、神は罪人が滅びに相応しいことを知っていながら、その罪人に対してこのように救いの御手を差し伸べておられるのです。「なぜ、あなたがたは死のうとするのか。」、なぜ、罪を悔い改めて救いを求めて出て来ないのかと言います。このことに関しては、イザヤもイザヤ書55：6-7でこのように言っています。「主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。：7 悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。」と、このように神は繰り返して罪人に対して「戻って来なさい、悔い改めてわたしのところに帰って来なさい、いつまで逆らい続けるのか？わたしはあなたに救いを与えよう！」と、このように神は招いておられるのです。まさに、私たちの罪を私たちが赦しを求めるなら赦してくださるのです。あなたが神の前に罪の赦しを求めるなら赦してくださるのです。皆さん、あなたがそれを言わなくてもあなたの罪は神の前に明らかです。あなたがそのすべての罪を告白しなければ赦されないのでしょうか？神はすべてのことをご存じです。神が求めておられるのは、あなた自身がこのように神に逆らう間違った生き方を止めたい、神に背を向けて逆らい続ける生き方を止めたい、私はこのすべてのものをお造りになった真の神を、そして、私を罪から救うために身代わりとなって十字架で死んでよみがえられた真の救い主なるイエス・キリストを私は信じて、この方に従って行きたいとすることです。神はそのようにあなたが罪を悔い改めて救いを求めて出て来るように、そのことを望んで待っておられると言うのです。神がまださばきを下されないのは、さばくことができないからではなく、あなたに対して寛容だからなのです。しかし、悲しいことに、恐ろしいことに、このような神の恵み、神が罪人であるあなたを愛し、そして、あなたが悔い改めるようにと救いの機会を与え、忍耐をもって待っておられるという、その神の恵みに対してあなたは「私には必要ない」と、すばらしいその恵みをその救いを軽蔑しているとパウロは言います。なぜ、あなたがその神のさばきから逃れることができるのか、なぜ、そのようなあなたに神は厳しいさばきを下されないことがあり得ようかと、パウロは迫るのです。

5節でパウロは続けてこのように言います。神の恵みを拒んでいるこの人たち、彼らはその恵みを軽んじているだけでない、「ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、…」と。初めに「ところが、」と言って、このような神のあわれみ、恵みが示されているにもかかわらず、あなたがしている選択は「かたくなさと悔い改めのない心」であると続けるのです。

「かたくなさ」：「頑固さ、強情さ」という意味です。神に対して心を開こうとしない、神に対して頑固であり続けるのです。私はあなたを必要としないと言い続けるのです。この「かたくなさ」ということばは「堅い、荒い」ということばから来ているのですが、その元になっていることばはそのまま医学用語になっています。「硬化」、例えば、「動脈硬化」というその「硬化」が実はこのことばなのです。動脈が硬くなって来る、これは病気です。パウロはここでそのように血管ではなく、人間の臓器ではなく、あなたの心がそのように堅くなっている、病んでいるとそのように言うのです。ソロモンは箴言の中でこのように言っています。28：14「幸いなことよ。いつも主を恐れている人は。しかし心をかたくなにする人はわざわざに陥る。」と。悲しいと思いませんか？神の祝福が与えられるにもかかわらず、その人たちは神の祝福を自らの意志でもって拒み続けているのです。その人たちに約束されているのはその人たちが受けるに最も相応しいもの、罪のさばきです。永遠のさばき、永遠の滅びです。神ののろい、神の怒りです。「幸いなことよ。」、祝された人たち、それは「いつも主を恐れている人」、「しかし心をかたくなにする人はわざわざに陥る」のです。

「悔い改めのない」：次に出て来ることばは「悔い改めのない」です。神に対して心をかたくなにして心を開こうとしない、神を心から受け入れようとしなない、それだけでなく、その人の問題は「悔い改めのない」、すなわち、神の前に悔い改めようとしなないのです。神の前に正しく歩もうとしなないのです。今までと同じように、神に逆らい続けることを選択し続けるのです。神に逆らいこの救いを拒み続け、そして、自分の好きなようにと、そのように神に逆らい続けているのです。

「かたくなさと悔い改めない心」と、「心」、聖書は私たち人間の問題がどこにあるのか明らかにしてくれています。それは「心」です。「心」が悪いと必ず行ないも悪いのです。私たちの行動は心を映し出すものです。私たちがどのような心でいるかはその行動を見れば明らかです。パウロが教えていることは、

あなたの問題はあなたの心だということです。あなたのその心が神に対してかたくなであり、どうしても私はあなたにこの心を譲らない、この心をあなたに明け渡さない、私は自分の好きなように生きて行きたいと、そのようにかたくなであり、そして、決して神の前に自分の罪を悔い改めようとしません。だから、あなたに待っているのは永遠の滅びであると神は警告するのです。

この人たちの問題は、神に対して逆らい続けているだけでない、神がその罪を赦すために備えてくださった救いを自らの意志で拒み続けているところにあるのです。皆さん、神に逆らうだけでない、あなたはこの神が備えてくれた、神がいのちをかけて備えてくれたこのすばらしい尊い救いを、あなたは自らの意志でもって拒み続けているのです。イエス・キリスト、あなたの罪の身代わりとして十字架で死んでくださったその救い主を、神が備えてくださったその救いを、あなたは「要らない、必要ない」と拒み続けている、そこに大きな問題があるのです。もし、そのような方がここにおられるなら、聖書のことはよくご存じかもしれない、聖書のことはよく聞いて頭にたくさん蓄えられているかもしれない、でも、あなたの心が問題です。あなたがこの神の前に心を開いていないなら、あなたがイエスを信じておられないなら、確実なことは、ここで警告されている警告はあなたに対する警告です。あなたがしていること、それは「あなたは神ではなくて罪を選択し続けている」のです。あなたがしていることは、神よりも罪を愛し続けている、そのような選択をし続けているのです。

3. 神に逆らっている結果

ですから、そのような人々に対して約束されていることはいったい何でしょう？ 5節の続きを見てください。「**御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。**」、「**御怒りの日**」とは最後の審判のことです。最後に、神がすべての罪人を神の前に立たせて、その罪をさばかれる、その最後の審判のことです。また、この「**御怒りの日**」に関して説明がされています。

「**すなわち、神の正しいさばきの現われる日**」と同じことを言っています。神が罪人をさばくとき、それは「**御怒りの日**」です。神はその罪に対してその怒りを明らかにされる、その罪がどれほど神の前に汚れた者であり、どれほどその罪を神は憎んでおられたのか、そのことを明らかにされます。「**神の怒り**」がその人の上に下ります。同時に、「**神の正しいさばきの現れる日**」だと言います。そのときに気付くのです。そのときに明らかになるのです。神の審判には一分の狂いもない、過ちがない、神のなさる審判は正しいと、パウロはすでに2節で教えてくれました。神のさばきは常に正しいさばきであると。そこまで聞いて私たちは大変なことが約束されていることを知るのですが、その後「**すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。**」と、その神のさばきを受けるその日に備えて、その日のために自分自身がその御怒りを蓄えていると言います。この「**積み上げている**」ということばは「蓄える、貯蔵する、宝を蓄える」とそのような意味でも使うことばです。悲しいことに、蓄えているのは宝ではないのです。蓄えているのは神の怒りだと言います。何と恐ろしいことでしょうか？これが罪人のことです。神の恵みを否定し続ける人々の姿です。クリスチャンがさばきの座に立つとき、それは神からほうび、祝福をいただくときでもあります。失われたすべての人に対する「**白い御座のさばき**」、神の最後の審判に立つことはありません。クリスチャンは天に宝を積むのです。そのことを望みながら、そのことを覚えて歩み続けようとしません。けれども、ここで言われているのはクリスチャンのことではないのです。この人たちが天に積んでいるのは「**神の怒り**」なのです。そして、その怒りはどんどん大きくなるのです。恐ろしいことです。

ソロモンは「伝道者の書」の中で、11:9「**若い男よ。若いうちに楽しみ。若い日にあなたの心を喜ばせよ。あなたの心のおもむくまま、あなたの目の望むままに歩め。しかし、これらすべての事において、あなたは神のさばきを受けることを知っておけ。**」と言っています。好きに生きてければそのように生きなさい、但し、あなたが覚えなければいけないこと、それは、あなたが為したすべてのことに対して神は正しい審判を下すということです。あなたはすべてのことにおいて神のさばきを受けることを知っておかなければならないと言うのです。次回、私たちは学んで行きますが、皆さん、種を蒔けばそれを刈り取るのは必ず自分です。私たちは人のせいになりたいかもしれない、何か別のことのせいになりたいかもしれませんが。病気であるとか、いろいろな口実を私たちは探しますが、神はすべて知っておられるのです。罪というのは私たちが犯したいから犯すのです。私たちはその葛藤の中に今も生きています、みことばに従って行くのか、自分の思い通りに生きて行くのか、その狭間の中であって苦しんでいます。闘っています。私たちは往々にして敗北することがあります。でも、私たちが覚えながら生きなければいけないことは、確かに、神はすべてのことを赦してくださった、だからといって私たちは好きなように生きてもいいのではない、私たちはこの神の栄光を現わして生きて行こうすることです。そのために生まれ変わったのです。そのために神は救ってくださったのです。だから、私たちは神が喜ばれるように生きて行くのです。神の前に喜ばれる選択をするのです。それによって神が喜んでくださるから、そのようにして私たちは生きて行くのです。私たちクリスチャンが覚えなければいけないことは、神は私たちの罪をすべて

ご存じですから、自分の行為に対しては責任を持たなければいけないということです。常に、神の助けをいただきながら私たちは神の前に少しでも喜ばれる生き方をして行こうとするのです。それは決して自分が誉められるためではなく、そうすることによって、私のような者を救い変え続けてくださっている神の御栄えが現わされるためです。同じ伝道者の書12:14ではソロモンはこのように言いました。**「神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。」**と、厳しいことばです。しかし、私たちはそのことを覚えなければいけないのです。そのような神なのです。私たちが行なったことだけでなく、心の中で抱いた思いに関しても私たちには責任があると言うのです。神のさばきは公正である、ゆえに、だれも弁解することができないのです。

皆さん、今日も私たちが学んできたところで、この読者たち、彼らはほとんどがユダヤ人だったでしょう。何度も繰り返すように、彼らは自分はユダヤ人だから救われていると思っていました。このような罪人の行為を行っていないから私は救われていると思っていたのです。でも、そのような人々に対して神が言われたことは、彼らの思いとは全く相反することでした。彼らが神から聞かされたことは、「あなたたちは罪がある、あなたたちは今、さばきに向かっている。なぜなら、このようなすばらしい救いをわたしが備えたのに、あなたはその救いを自らの意志で拒み続けている。そのようなあなたにどうして神の祝福があるのか！」ということでした。「ヘブル人への手紙」の著者はこのように言います。2:2-3a **「もし、御使いたちを通して語られたみことばでさえ、堅く立てられて動くことがなく、すべての違反と不従順が当然の処罰を受けたとすれば、」**と、これは旧約の時代において、神は御使いたちを通して神のメッセージを人々に語ったけれど、人々はそれを受け入れるどころかそれに逆らったということです。それゆえに、彼らには当然の報いとしてのさばきが与えられました。彼らがさばきを受けるに相応しい罪を犯したからです。これはイスラエルの歴史に明らかです。そして、3節には**「:3 私たちがこんなにすばらしい救いをないがしろにしたばあい、どうしてのがれることができましょう。」**とあります。著者は旧約の人々のことから新約の人々のことに話を向けるのです。旧約の人々もその通りだった、だから、新約の時代に生きているあなたも神に逆らうなら、そこには必ずさばきがある、そのことはもう、この歴史が証明していると言うのです。もし、**「私たちがこんなにすばらしい救いをないがしろにしたばあい、」**とこれは条件節です。もし、あなたがこのようなことをするなら…と言います。**「ないがしろにする」**とは見て来たように**「軽んじる」**ことです。それに対して関心を払わないこと、無視することです。そのすばらしい救いを受け入れないことです。もし、あなたがこの神によって備えられたすばらしい救いを受け入れようとしないで、それを軽んじるなら、それを無視するなら、それを必要ないとするなら、その人には間違いなく罪のさばきが待っていると言うのです。なぜなら、その人は神がせっかく備えてくれた救いを自らの意志で拒んだからです。

パウロはこのユダヤ人たちに何を教えたかったのでしょうか？パウロはユダヤ人たちに、あなたたちは今どこに向かっているのか、そのことを正確に教えようとしたのです。「誤解のないようにしなさい、なぜなら、あなたたちは天国に行くと思っているけれど、とんでもない、あなたたちは今、地獄に向かっている！そのことに気付きなさい！そして、そのことに気付いたなら、神が備えた救いをいただくために悔い改めて出て来なさい、救いをいただくために出て来なさい。」と、そのように勧めるのです。憶えておられますか？イエス・キリストのところにある人々がエルサレムで起こった出来事を告げるためにやって来ました。どのような出来事だったか？それは、ガリラヤの人々が神殿にあっていけにえを捧げようとしていた、そのときに、ピラトによって彼らは殺害されました。ピラトがしたことは、その彼らが捧げようとしていたいけにえの血に、そのいけにえを捧げようとしていた人々の血を混ぜたのです。これはルカの福音書13章に記されている記事です。13:1 **「ちょうどそのとき、ある人たちがやって来て、イエスに報告した。ピラトがガリラヤ人たちの血をガリラヤ人たちのささげるいけにえに混ぜたというのである。」**と、その報告を聞いたイエスはこのようなことを言われます。2-3節**「イエスは彼らに答えて言われた。『そのガリラヤ人たちがそのような災難を受けたから、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。:3 そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。』**と、この出来事を使ってイエスは何を言われたのでしょうか？こんな大変な災いに会った人々は、もしかすると、他の人に比べて何か大きな罪があったからこのような罰を受けたのではないかと、そのように思ったのです。イエスの答えは「とんでもない、それは違う！罪を悔い改めなければみな同じように神によってさばかれるのだ」ということでした。そして、もうひとつの話が続けてされます。4-5節**「:4 また、シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。」**と、この出来事もみな知っていました。シロアムの塔、エルサレムの南東部にあるシロアムの池、恐らくその近くに塔があったのです。その塔が倒れて十八人が亡くなったと言います。ギホンの泉から流れ落ちる水です。シロアムの池というのは、全盲の人がそこに行って目を洗うようにとイエスに命じられたところです。ヨハネの福音書9章に出て来る話です。その池です。

そこにあった塔が倒れて十八人が亡くなった、イエスはその出来事も使ってこのように言われたのです。あのような災いに会った人たちはエルサレムに住んでいるそのような災いに会わなかった人たちに比べて罪深いのでしょうか？ 5節「**5 そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。**」と、同じことばが繰り返されています。

イエスが言いたかったことを考えて見ましょう。確かに、この世の中でも大変なことが起こっています。中国でものすごい大地震があって私たちの心は痛みます。たくさんの方々が亡くなりました。では、それは神のさばきなのでしょうが？ 気を付けなければいけないことは、彼らと私たちを比較したとき、罪人であるという点においては全く違いがないということです。彼らの方が罪が重いから神がさばいたのでしょうか？ 否です。神が私たちに教えようとしていることは「あなたに必要なことは自分の心を吟味することだ」ということです。どのような理由で災いが下ったのかを考えることよりも、自分の心を吟味することだと。人に対してどうこうではなく、あなた自身がこの神の恵みをしっかりいただいているかどうか、この恵みによって罪赦されているかどうか、そこが問題だということです。皆さん、みことばが私たちに何度も教えてくれたのは、救い、神の恵みというのは個人的なもの、あなたに対するものだということです。つまり、あなた自身がその恵みを受け入れるかどうかを決心しなければいけないのです。あなたはその神の救いを受けておられますか？ あなたはこの神が備えてくれた素晴らしい罪の赦しをいただいていますか？ 神があなたに問いかけるのはそこです。「わたしの関心はあなたなのです。あなたはこの救いを受けていますか？」と問われるのです。イエスがユダヤの教師たちにこのように厳しいことを言われました。「**偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。**」(マタイ7:5)、同じことを言われています。先ず、あなたがしなければいけないことは自分をしっかり見つめること、自分を吟味することだと言うのです。私の罪が赦されているかどうか、あなたはそれを第一に考えなさいと言われます。

あなたはこの救いをいただいておりますか？ あなたはまだ神に対して頑なではありませんか？ もし、そうなら、この神のみことばはあなたに警告を与えます。あなたの罪はすべて覚えられていて、あなたの罪は必ず正しい審判者である神によってさばかれます。そこには何の救いもありません。そこにあるのは神の怒りだけです。なぜなら、今あなたは神の怒りを積み上げているのですから。こうして逆らい続けているあなたは怒りを積み上げているのです。怒りを蓄えているのです。でも、感謝なことはそのようなあなたを神は赦してくださるのです。今、あなたが救いを求めて主の前に出て行くなら…。いいですか、皆さん！ 救いは与えられます。チャンスはあります。どうぞ、その機会を無駄にしないでください。そのことを心からお勧めします。